

大西さんを憶う



本学会の10年間のあゆみについて語る大西先生

4月28日にはまた全学連の学生が新橋駅その他であばれた。このニュースを読むため夕刊を開いたところ思わず茫然とした。死亡ニュース欄に大西さんが慈恵医大の病院で脳内出血で逝くことがでていたからである。近頃学会の会合にお見えにならないのでよほど御多忙なのだろうと思っていた。御病氣を知っていたら何をおいても御見舞に上ったのに……。

大西さんにはじめてお目にかかったのは刊行物委員会幹事をおおせつかってのはじめて理事会に出席した時である。ちょうど大西さんが会長の任期満了の理事会であった。学会誌の原稿が集まらないという話が出たとき、“今日では会社の雑誌でも原稿料を出さないと原稿が集まらない。基金として10万円出すから有効に使ってほしい”といわれた。

つぎに、昭和35年、東京で国際統計会議が開かれた時のことである。来日した著名学者によるセミナー——もちろん有料でしかもかなり参加費が高い——の計画がほかであった。学会の若い人々から、“せっかくの良い案だから各自が多少出してもよいから勉強会をしたい”という強い希望が出された。ISIの元縮めの行政管理庁の後藤正夫統計基準局長（現大分大学々長、フェロー）から学者はどこの国でも金とは縁が薄い。滞在費の一助にもなるか……”という賛成が得られた。ところで先立つものは金である。会社から寄付を募る案も出たが横山勝義庶務理事から、“後藤先生が金集めに苦勞しておられるから OR学会でも同様なことをやることは好しくない”と否決された。思い余って大西さんのところにかがたら快く10万円下さった。このおかげで Hamaker, Wold, C.R. Rao, Lindley の4氏を招いて勉強会を開くことができた。Hamaker や C.R. Rao は日本人の若手学者の優秀なことにお世辞でなく驚いたようであった。

大西さんにはあのお年にかかわらず向学心に燃える青年のようなところがあった。Morse 教授が来日した時、学会で歓迎会を開いた時もホストの1人として出席され、卒直に OR の効用について例を挙げて質問された。この時 Morse 教授からの返事に大いに啓発されたものである。東京の理事会ばかりでなく地方大会にも予告なしに出席され関係者を激励していただいた。ORAW の時もひょっこり入って来られ、暫く討論に耳を傾けて帰られた。

ある理事会で OR 学会賞を出そうという話で某理事から提案されたことがある。この金は毎年 1～2 万 OR 関係の某団体から寄付を受けるというのだった。OR 学会は他の大きい学会に比べて一般的すぎるくらいがある。特定の業界がないからいつもピーピーしている。しかし、年 1～2 万なら出せないこともない。それより毎年誰かが頭を下げて貰いにゆかなければならないようでは……と難色が強かった。その時、大西さんが突然口を切られ、“今どき賞金だったら最低 10 万円出ないと賞金とはいえない。私が 100 万円寄付するから賞金にあててほしい。良い研究なら 20 万円でもよい”，ということで大西賞が決まった。そのあと秘書の方から連絡があり、今村和男会計理事ほかの関係者で参上していただいた。この時初めて知って驚いたことだが、上記の原稿料の基金も、ISI の勉強会の金も、この賞金もすべて大西さんの私財であったということだ。

学会は今まで満 6 年間、日本構造橋梁研究所の田原保二社長の御好意で事務所を無料で使わせていただいた。しかし同社も社業隆盛のためスペースが無くなった。移転したくても金がない。貧者の一灯ということもあるから特別会費を全会員に臨時にお願いすることになったがこの時も大西さんは卒先して 10 口出してくださった。

どうも金のことばかりになったようである。ORAW は学会の満 10 年経過の記念行事だが、このほかに満 10 年の歩みという特別号を発行することも計画されていた。学会が生まれるまでと生れてからの 10 年間の思い出に関する 2 つの座談会が開かれた。あの方方は昭和 43 年 1 月 11 日、丸の内パレスホテル内の同友クラブ元会長、元庶務常務理事の方々に集っていただいた。両者とも関係者以外知らないエピソードがあり面白かったがこれらは既に御承知の点といえよう。記録によると大西さんは 2 代会長であるが、御自身は初代会長と考えておられたようで、あるいは自分の子供のように思われていたのではないかと思う時もあった。たとえば、学会と不即不離の形で丸ノ内 OR クラブという昼食後の案が出た時も、いろいろ便利ということを考え日本工業倶楽部でやるようにといわれ名義を貸して下さったばかりでなく、CIDS の米州大会でブラジルへゆかれた時には土産話もして下さった。

大西さんとはあくまで学会を通じての御つき合いでしかない。大西さんの信仰のことや御家族のこと、戦後の日立の再建や電機業界のため活躍された事情などは全く存じ上げない。逝くなられたあととはじめてキリスト教（メソヂスト派）の信者であられたことを知り深い感動を覚えた。明治 29 年生れの方である。この年の方々の中にはキリスト教の教化を受けられた方が多い。日露戦争、第 1 次、第 2 次世界大戦という激動を経てこれ、世のため人のためという奉仕の精神が強いのであろう。こういう大西さんのような方を失ったことは、学会のために残念でたまらない。もっといろいろ指導して戴きたかったと思うのは私 1 人だけではないだろう。いまでも大西さんが何処からかヒョッコリやってこれ、 “矢部さん、ポカーね……” という特長のある口調で話しかけて下さるような気がしてならない。謹んで御冥福を祈る次第である。（矢部 真）